

FLUSSシンフォニカ 第2回定期演奏会

2005年 10月2日(日)
開場 13:30 開演 14:00
麻生文化センターホール

ご挨拶

本日はお忙しい中、私たちの演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございました。昨年9月の第1回定期演奏会を行いましてから、早いものでもう一年が経ちました。夢中だった1回目に比べて、さらに充実した音楽になるよう、団員一丸となって音作りに励んでまいりました。

私たちのオーケストラでは、古典派の音楽を大切にしています。

とりわけベートーヴェンの音楽には、プロ・アマを問わず学ばなければならない音楽の秘密が数多く詰まっており、今後も私たちの道標として存在し続けるでしょう。

新しい試みとして、今年は演奏面だけでなく、何かと大変で多岐にわたる運営面にも団員全員参加の気概を示すべくワーキンググループを組織し仕事を分担し、このコンサートを創り上げてきました。

その上、今年もまたこの演奏会のために、出雲・常陸の国から楽器を持って馳せ参じた熱烈アマオケ愛好家の団員も健在です。

今後とも長い目でこのオーケストラをみていただき、変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げます。

2005年10月2日

FLUSSシンフォニカ団長 藤巻 肇

～ 団員募集中 お問い合わせ先 ～

原 聡之 090-3315-1490
flusssymphoniker@infoseek.jp

当楽団HP <http://fluss-symphoniker.hp.infoseek.co.jp/>

ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven
「コリオラン」序曲 作品62
"CORIOLAN" Overture (Op.62)

ドビュッシー
Claude Debussy
小組曲 (アンリ・ビュッセル編曲)
Petite suite (Arranged by Henri Busser)

～ 休憩 ～
Recess

ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven
交響曲第8番 へ長調 作品93
Symphony No.8 in F major (Op.93)



指揮: 藤本 晃
Conductor: Akira Fujimoto

FLUSSシンフォニカ
FLUSS Symphoniker



指揮者: 藤本 晃

Conductor: Akira Fujimoto

1962年玉川大学文学部教育学科音楽専攻卒。
1967年ウィーンコンセルヴァトリウムに留学。ヴァイオリン、室内楽をカール・バリリ氏に、指揮をヴァイスベルグ氏に師事。

1969年に帰国後、玉川大学文学部芸術学科に勤務。指揮を荒谷俊治、山田一雄、石丸寛の各氏に師事。玉川大学教授、玉川大学芸術専攻科主任、玉川大学管弦楽団部長・常任指揮者を歴任し、2003年退職。現在、FLUSSシンフォニカ音楽監督、FLUSSシンフォニカ常任指揮者。

FLUSS Symphoniker

フルスシンフォニカ

玉川大学管弦楽団OB・OG有志が中心となって、2004年1月に発足したアマチュアオーケストラ。
東京都町田市を活動の拠点とし、2004年9月20日には杜のホールはしもにて第1回定期演奏会を開催。
在籍団員は玉川大学管弦楽団OB・OGや同大学継続学習センター受講生など、55名。(2005年9月現在)

FLUSSとは、

- 1.ドイツ語で、①川, 河川 ②流れ, 流動 のこと。
- 2.管弦楽曲スコア(総譜)でのパート配列最上段の「FLÜTE」と最下段の「CONTRABAŠŠ」のパート名の文字から作った造語。
- 3.団員は、藤本晃先生のご指導の下オーケストラで演奏してきた者やヴァイオリンの弟子であることから、古巣(ふるす)に戻って音楽を続ける…という意味。
- 4.Fujimoto Leadership Unison Sensational Session (!)



ベートーヴェン 「コリオラン」序曲 作品62

Ludwig van Beethoven, "CORIOLAN" Overture (Op.62)

この曲は1802年にウィーンで上演された戯曲「コリオラン」に触発されて書かれた作品とされていますが、1807年に作曲されたことから、実際に序曲と使用されることを念頭に置いた実用的な作品と言うよりは、あくまでもここに着想を得た作品と考えた方がよいでしょう。初演は作曲年と同じく1807年に行われ、同じ演奏会で交響曲4番・ピアノ協奏曲4番も初演されています。編成は弦楽5部に木管+ホルン2管編成、さらにトランペット・ティンパニを加えたもので、第1・2交響曲と同じ編成となっています。

さて、戯曲コリオランで描かれたのは古代ローマを舞台にした物語で、主人公はコリオラヌス（ドイツ語読みではコリオラン）と呼ばれる英雄。武勲をたてローマでのし上がった主人公が政治的な対立からローマを追放されてしまう。やがて彼は隣国のヴォルシアの将軍として再起し逆にローマに攻め入り、その城門まで迫るが、母や妻に諭されヴォルシアをも裏切ることとなってしまいます。そのためついに進退窮まり、謀殺されてしまうという物語です。

この物語に触発されて書かれた序曲コリオランは、ベートーヴェン得意のソナタ形式で書かれています。力強い弦楽器のユニゾンによる序奏に始まり、これから始まる物語を暗示するかのような「ワクワク感」を感じさせる第1テーマがこれに続きます。そして平行調に転じて奏される第2テーマは何かを象徴するような感もあります。続く提示部コーダから展開部は切れ目無く一体となって、第1テーマ後半のモチーフを使用しゆきますが、この部分はやや軽めのものとなっています。そして再現部からベートーヴェンの特徴でもある第2展開部とも呼ばれる第4部へと進み、あたかも再現のように第2テーマが奏され、終結へと向かいます。

全体として壮大かつ綿密なコンポジションというより、何かを暗示あるいは予兆するようなワクワク感に満ちて、一気に聞かせてしまう仕上がりとなっています。それゆえか、この曲の作曲に要した時間も他の作品に比べてきわめて短かったそうです。また、冒頭序奏のテーマは主人公コリオランの尊大な性格を、第2テーマは母や妻を暗示していると分析する人もいます。

ドビュッシー 小組曲 (アンリ・ビュッセル編曲)

Claude Debussy, Petite suite (Arranged by Henri Busser)

この曲は元々ピアノ4手（連弾）用に書かれた作品で、「ベルガマスク組曲」や「2つのアラバスク」などと並んで彼の初期を代表する傑作のひとつに数えられています。また本日演奏する管弦楽編は指揮者で彼の友人でもあったアンリ・ビュッセル（1872～1973）によって1907年に編まれたもので、今日では原曲の連弾同様に広く親しまれているものです。全体は以下の4曲からなります。

1. 小舟にて -En Bateau- ト長調

鏡のような水面を静に漕ぎ行くようなゆったりと美しく浮遊感のある旋律にはじまる3部形式の美しい作品。

2. 行列 -Cortège- ホ長調

付点のリズムが印象的な軽快なテーマに始まり、これと対照的にシンコペーション気持のよいテーマを持つ中間部をはさんで華やかに曲を閉じます。

3. メヌエット -Menuet- ト長調

典雅で古風なかおりも感じさせる美しい旋律をテーマとするメヌエット。主調はト長調ですが、多分に旋法的であるため、調性を意識することは少ないでしょう。

4. バレエ -Ballet- 二長調

中間部にワルツを挟んだ明るく軽快な曲。他の3曲同様の3部形式ですが、終局となるこの曲の第3部は、中間部のワルツも用いるなど少しひねりが効いていて大がかり。全体のフィナーレにふさわしいものとなっています。

さて、ドビュッシーの音楽は印象派と呼ばれ、独特の色彩感やある種の浮遊感を感じさせますが、こうした感覚を醸成しているのは、和声の機能の緩やかな解体と5度堆積による新しい和音、全音音階や旋法の応用といった響きに関する部分と、動機労作と呼ばれるような隙のない展開を伴った構成感からの解放が作用しているように思われます。

この小組曲は初期の代表作ですから、こうした特徴を網羅しているわけではありませんが、その萌芽を見取れる点が多々あります。たとえば第1曲の美しい旋律の背景となるハーモニーの流れの浮遊感は和声の機能の緩やかな解体のによりもたらされています。ズバリ第3曲は旋法を用いていますし、全曲の随所に全音音階的な味付けも感じられます。そして何より「組曲」という柔らかい形式で書かれている点も忘れてはならないでしょう。

ベートーヴェン 交響曲第8番 へ長調 作品93

Ludwig van Beethoven, Symphony No.8 in F major (Op.93)

この曲は1812年、ベートーヴェン42才の時に作曲されましたが、この時期は彼の生涯から言うと、あの交響曲第5番などを生んだ中期（第2期）と第9交響曲に代表される後期（第3期）の狭間の創作力にややかげりのあった時期にあたると言われていています。確かに中期の名作にみられる聞き手をぐいぐい引っ張ってゆくような強烈さや、後期の大作に感ずる深い精神性といったものはみることは出来ませんが、高い技術によって完成された立派なコンポジションであることは揺るぎのない事実です。

しかしながら、それゆえにやや人気の点では劣り、演奏回数などはニックネームのついた交響曲に比べるとずいぶん少ないようです。初演は1813年4月、小編成によりルドルフ大公の前で第7交響曲とともに行われ、翌年、公開初演が行われています。全体は以下のような4楽章構成で演奏時間は約26分程度の中規模な作品です。

第1楽章 Allegro vivace e con brio へ長調

彼の特徴である4部からなるソナタ形式で書かれています。序奏なしに現れる第1テーマはいくつかのモチーフから出来ていますが、このうちの冒頭のモチーフが展開部を中心に主に用いられます。また、第2テーマは二長調に始まり八長調に入ってゆくという、ひとひねり効かせた工夫がされています。また、この第2テーマは第9交響曲の1楽章第2テーマともよく似ています。

第2楽章 Allegretto scherzando 変口長調

複数のテーマを持つ2部形式で書かれた、穏やかな諧謔味を持った快作。どこか初期の作品やハイドンを思わせる均整の取れた古典美を感じる楽章です。

第3楽章 Tempo di menuetto へ長調

この楽章もベートーヴェンが古典派の作曲家であるという事実を再認識させてくれるような、典型的な古典派のスタイルのメヌエット楽章となっています。

第4楽章 Allegro vivace へ長調

第3楽章と同様、序奏なしで4部からなるソナタ形式で書かれています。冒頭の第1テーマは3連符の連打「タタタ・タタタ」と8分音符4分音符からなる「タタ・タン」の単純かつ対比的効いた洒落たモチーフから始まり、また全曲を通して終始繰り返されますが、アマチュアの我々には気を抜けない手強いモチーフでもあります。また、第2テーマは第1テーマと対照的に朗々と歌われますが、属調（八長調）ではなく変イ長調とこれまたひねりの効いた調設定がされています。

(1stVn,伊藤高明)

役員・団員名簿

代表者・団長	藤巻 肇
運営事務局長	北見 裕
会計担当役員	内田 雅之
音楽監督・常任指揮者	藤本 晃
コンサートマスター	原 聡之
管長	風間 克彌
インスペクター	星合 宏美
ライブラリアン	千成 拓夫



1st Violin

赤川 実和子
伊藤 高明
太田 真砂子
小倉 達夫
加藤 一法
川上 邦子
○原 聡之
蒔田 結希子
丸山 泰子
山本 真一郎
新井 恵(賛助)
開沼 麻代(賛助)
川口 馨(賛助)
田代 宏毅(賛助)
長谷川 由希子(賛助)

2nd Violin

倉持 雅子
小池 奈緒美
小島 果織
○塩野 えりさ
島田 ひとみ
斯波 保子
日高 弘子
平林 せつ子
堀 智子
矢生 美幸
斎藤 千絵(賛助)
福本 牧(賛助)
藤原 由木子(賛助)
皆上 晶子(賛助)

Viola

小川 貫
篠原 祥子
島野 里恵子
○富澤 裕子
夏目 夕樹
堀 徹造
松下 恵利子
真船 潤
大西 延佳(賛助)
大西 秀樹(賛助)
川崎 公子(賛助)
代田 滋子(賛助)
山中 里稲(賛助)

Violoncello

内田 雅之
柏原 絵里香
鈴木 貞一
○千成 拓夫
長谷部 啓
ヴァーツラフ・アダミーラ(賛助)
宮城 志野(賛助)
若狭 直人(賛助)

Contrabass

○山本 秀一
佐々木 秀夫(賛助)
佐藤 光俊(賛助)
高橋 慶十(賛助)
西崎 三浩(賛助)

Flute & Piccolo

○木下 真良
平良 啓
富永 順一
古河 義仁
渡邊 真理子

Oboe

○小沼 健司
金谷 弘樹
佐々木 恭子

English Horn

矢生 徹

Clarinet

落合 徳子
○星合 宏美

Fagotto

○荒井 博
高林 美樹(賛助)

Horn

岡 祐子
○風間 克彌
北見 裕

Trumpet

○太田 聡
松尾 信之
青木 日出男(賛助)

Timpani & Percussion

辻本 洋一
中村 耕三
○藤巻 肇
長尾 静代(賛助)

Harp

徳永 泰子(賛助)

○=首席

FLUSS
Fujimoto Leadership Unison Sensational Session
SYMPHONIKER

